

38  
光村 小国 621

垣内松三著

教育部  
資料室

# 草かわ

新国語 六年上

文部省検定済教科書



小KC  
Mi65

教  
34  
01



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

60254

教科書文庫

6
810
34-1950
01304 49807



指導者のために

(一) この本は、国語学習を総合し統一するために、現実的生活に取材し、その充実と向上を図りながら、身心の発達に即して国語学習における諸作業を自発的創造的に導くように組織し編集してある。特に言語活動の拡大と深化を中心として、理解と表現の学習が興味のうちには有機的発展的に行われるように努めた。

(二) この本の内容は、次の四つの題目に分かれている。

一、わか草

人間性を主題として、詩・作文・手紙などを提出した。親子の愛・友愛を通じて、人間精神の源泉をくみ、人間生活の基盤を養いながら、本学年に展開される言語活動の基本的態度を示すことにする。

二、スポーツ

身体と精神を結んで諸種のスポーツに取材し、詩・手記・物語・説明文などを提出した。人間現成の動力である健康と心情を結んで、さらに至高なスポーツ精神の体得と至純な言語活動を展開することにする。

三、現実を追って

(三) この本に提出した新語は三二四語で、毎ページの新語率は二・九五語である。各課ごとに学習の仕方を示しての向上に努めるとともに、新語表・新字表を掲げて使用上の便を図ることにした。

(四) この本のさし絵は、学習上重要な位置を占めるので、特別な考慮が払われている。

(五) この本の使用期間は、だいたい四月から七月（地方によつては八月）までを目標として、大題目を平均一か月あてとし、それを固執する必要はない。地方の実情と児童の個人差を考慮して有効に使用されたい。  
(右は本書の概要である。詳細は新国語指導書を参照されたい。)

四、燈台島

個人と環境を主題として、新聞・ラジオ・映画し、「報道」を提出した。その発達・意義・価いて科学と生活の連関を考えさせ、現実生活に言語活動の文化的機能について理解を深めることにする。

広島大学図書

0130449807



贈 寄

教科書文庫

6

810

34-1950

0130449807

昭和二十五年八月十二日  
文部省検定済  
小学校国語科用

わか草

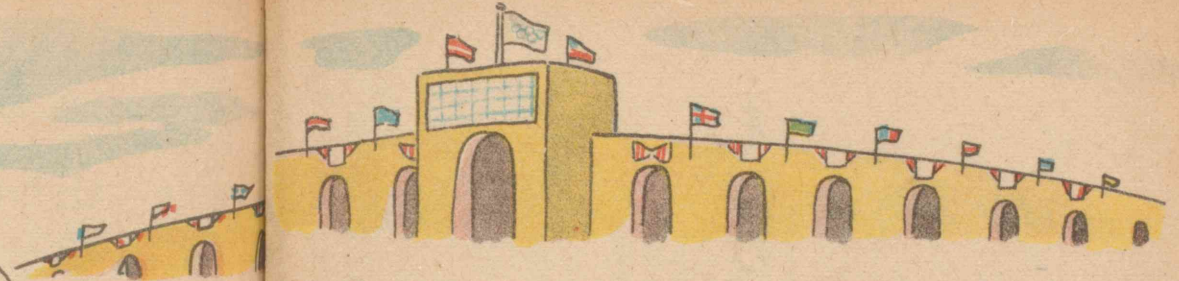
広島大学図書

0130449807



新国語六年上

広島大学  
教育学部図書



目次

一 わか草……………4

(一) 春の朝

春の朝

すずめ

(二) わか草

(三) 進路

二 スポーツ……………30

(一) ぼくは捕手だ

(二) ベリーとぼく

(三) 人馬ともに

(四) オリンピックの思い出

三 現実を追って……………58

(一) 実きよう放送

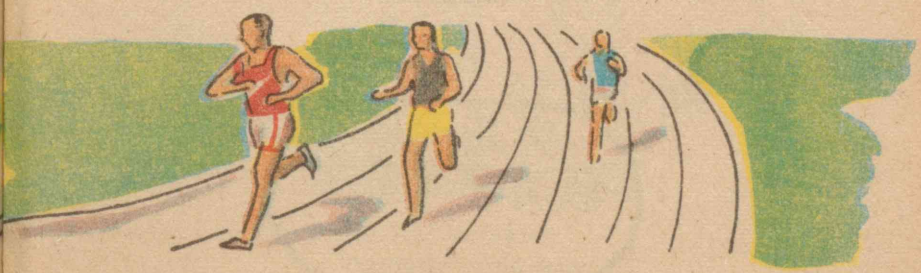
(二) ニュース

四 燈台島……………84

(一) 海はよぶ

(二) 燈台島

新しいことば  
漢字表……………112



一 わか草

(一) 春の朝

春の朝

わたしは、公園のいすにこしがけた。  
頭のすぐ上には、  
さくらの花が、群がってさいていた。  
大きな、大きな花のかんざしを  
地上にさしたように明るい。

どこからか、白いはとが、

目の前のしばふに飛びおりてきた。  
そのあとから、またやってきた。  
二わのはとは、首をひよいひよいと動かして、  
やわらかなしばふを歩きだした。

そこへ、子どもをおんぶしたおかあさんがきた。  
そうして、しばふにすわった。  
子どもが、おかあさんのせなかからおろされた。  
自由になった子どもは、よろよろ歩きだした。  
みどりのしばふをふむ足が白々と見える。  
朝の光が、  
おかあさんと子どもを照らしている。



「はとぼつぽ、はとぼつぽ。」

おかあさんが、歌うような声で、手を動かしてよんだ。二わのはとが、ひよいひよいと近づいた。子どもが、つかみたそうにして手を出した。

はとは、ばたばたと二三歩とんだ。

子どもが、びっくりしたようにわらった。

おかあさんもわらった。

わたしは、この明るい母と子のわらいにみとれた。

大きな花のかんざしは、

光をすつていよいよ明るい。

なんと平和な春の朝だろう。

### すずめ

私は庭園のなみ木道を歩いていった。犬は前を走っていた。

とつ然、犬はきざみ足になって、えものをかぎつけたように身構えて歩きだした。

私はなみ木道のかたわらに、くちばしの黄色な、頭の上に綿毛のはえている、一わの子すずめをみつけた。すから落ちたのだ。——風はひどくなみ木のえだをゆすぶっていた。——そして、そこにじつとすくんだまま、子すずめは、まだはえきらないつばさをい

たずらにばたばたさせていた。

犬が、そつと近づいて

いった時、とつぜん、

すぐ、かたわらの木か

ら、のどの黒い親すず

めが、ちょうど小石のように、

犬の鼻先に飛びおりた。そして、全

身をぶるぶるふるわせながら、あわ

れな絶望のさけびをあげて、かれは、

齒なみのきらめく大きな口の方へ二

三ど飛びかかった。

子どもを助けようと思つて、身をも



つてかばつているのだ。——けれども、その小さな全

身は、おそれおののき、その声はあやしくしわがれ

ていた。おそろしさのために、気を失いながらも、

かれは身を投げだしたのだ。

親すずめの目には、犬がどんなに大きな怪物に見え

たことであろう。それでも、かれは安全な高いえだ

にとまっていることはできなかつた。——その意志よ

りも強い愛が、かれを飛びおりさせたのだった。

私の犬は、じつとたちどまっていたが、あとずさり

をした。——犬もまた、この力を認めたにちがいない。

私は急いで、めんくらつてゐる犬をよんで歩きだし

た、厳しゆくの感にうたれながら。

そうだ。わらってはいけない。私は、小さな、悲壯な鳥に対して、その愛の深刻こくかくに対して、確かに厳しゆくいづの感にうたれた。私は思った。愛は死よりも、死のおそろしさよりも強い。ただそれのみによつて、愛のみによつて、人生は保持され、進歩するのだと。

### 学習の仕方

- 一 「春の朝」の明るく、愛に満ちた気分を読みとるようにしましょう。
- 二 「すずめ」は、かいつまんでいうと、どんなことを歌った詩でしょう。
- 三 「春の朝」「すずめ」を読んで感じたこと、心をうたれたことを文に書きましょう。
- 四 「春の朝」と「すずめ」のつながり、書き表わし方のちがいで考えてみましょう。
- 五 「父母の愛」について詩を書いたり、話しあったりしましょう。

### (二) わか草

朝早く、ぼくはくろをつれて、散歩に出かけた。

よし子さんが、家の前をはいっていたが、

「公園にいくの。わたしもいきたいと思つていたところよ。」

というので、いっしょにいった。

空はすつきりと晴れわたっていた。道ばたのわか草に、朝の日がきらき



らとかがやいていた。

道の石ころが、一つ一つくつきりとかげをひいていた。ぼくたちは、かわりばんこに石けりをしながら、歩いていった。

あとになり先になりしてついてきたくろが、それを追いかけた。「初めて学校にはいったころを、思いだすような朝ですね。」

「あのころ、くろはまだ子犬で、毎朝、きんきん、あとをしたってこまったな。」

ぼくたちはわらいながら歩いていった。

日曜日だというのに、朝まだ早いためか、公園には人かげも見えなかった。満開のさくらに朝日が照りはえて、うす緑のしばふの上にかげをおとしていた。

おかの上に出ると、町のけしきが一目に見わたされて、やわ

らかな風がほおをなでた。家々の屋根がわらが、さざなみのように光っている間を、大川がS字型に大きくうねっていた。大きな銀の帯のようにまばゆかった。その上にかけられた鉄きんコンクリートの橋を、馬車やトラックがさかんに往復していた。

「おや、だれかしら、あの歌声。」

「小川くんらしいな。——びっくりさせてやろうか。」

ぼくたちは、歌声のする方にそっと近づいていった。そのあたりは、さくらのえだが低くたれているので、人かげが見えなほほどだった。くろがかけてだしていつて、小川くんじゃれついたので、すぐわかってしまった。

「やあ、おはよう。」

小川くんが、花の中から顔を出した。



ぼくたちが、花の下をくぐっていくと、ベンチがあって、小川くんのおかあさんがこしかけていた。

「こんなに満開のさくらを、私たちだけで見るなんて、もったいないような気がしますね。」

おかあさんはわらいながらおっしゃった。そして、  
「人なつこい、いい天。」

といって、くろの頭をなでてくださった。くろはうれしそうに、大きくおをふった。

ベンチのあたりも、うっすらとわか草がはえて、すがすがしい気持ちだった。みつばちのはねの音が、しきりに聞えていた。

小川くんが、また歌いだした。このごろ習っている「わか草の歌」だった。ぼくもよし子さんもいっしょに歌った。

もえいずる	わかくさのめは
めざめたる	つちのこえなり
はるのひの	てらすひかりを
みにあびて	そだちゆかばや
ゆたかなる	のぞみいたきて
のびよかし	いざのびよかし
くににみつ	おさなきこらは
あらたなる	ときのこえなり
さみどりの	あさのひろのを
てをとりて	すすみゆかばや



おおいなる　ゆめをいだきて  
のびよかし　いざ　のびよかし

「この歌は、ぼくのおかあさんが大すきだよ。」  
と、小川くんがいうと、

「子どもに対する母の願いが、よく歌いこまれていますから。」  
と、おかあさんがやさしくおっしゃった。

「わたしも大すき。わたしたちの希望にぴったりと合っている  
ような歌ですから。」

と、よし子さんがいった。

ぼくは、この歌がすきだという小川くんのおかあさんの心持  
が、よくわかるような気がした。

小川くんは、母と子の、ふたりだけのくらしであった。満州  
から北海道へひきあげ、この町に移ってきたのは一昨年の三月  
であった。ずいぶん苦勞されたらしいが、小川くんにはちつと  
も暗いところがないばかりか、反対に、こちらが明るくさせら  
れるくらいに、のびのびとほがらかにふるまっている。

おかあさんが会社に勤めていられるので、小川くんは、朝早  
く起きて手伝いをしたり、夕方には、夕飯のしたくをすること  
もあるということだが、それをちつとも苦にしないばかりか、  
むしろ、自分から進んで喜んでしているらしかった。近所でも、  
孝心の深い子どもだという評判だそうだ。

日曜日の朝に公園を散歩するという、そうしたささいなこと  
にも、清らかな心と深い愛で結ばれている母と子のすがたが、

よく表われているように思われた。戦後の日本国じゅうには、不幸にあえぐ人たちがどれだけいるか知れないが、みんな、小川くんたちのように、明るくたちなおってほしいものだと思わずにいられない。

歌い終ってから、

「きみ、この町に来てから、もう、二年過ぎたね。」

と、ぼくがいうと、

「ぼくが転校してきた時、先生が、何がすきかとおたずねになったので、歌がすきですといったら、歌ってごらんとおっしゃっただろう。ぼくが、『春の小川』を歌ったら、『小川が小川の歌を歌った。』といって、きみたちわらったね。」

と、小川くんがいった。

その時のことを思いだして、みんながわらった。

「ぼく、みんなに親切にしてもらって、ほんとうに楽しく勉強ができてうれしいよ。」

と、小川くんがいうと、

「一男は、いいお友だちをもつてしあわせですね。」

と、おかあさんがおっしゃった。

ぼくは、もつといい友だちになってあげなければならぬと思つた。なんといいつても、小川くんは不幸なんだから。

「人がだいぶ出てきましたね。そろそろ、帰りましようか。」

おかあさんが、そっくりながらベンチから立った。立つひょうしに、さくらのえだにふれると、花びらがかみの毛にちらちらと散った。

「そのままにしておきなさい。」  
と、小川くんがいった。

おかあさんはわらいながら、そのまま歩きだされた。  
花ざかりのさくらなみ木の道を、三人で石けりをしながら帰  
った。くろが、また、それを追いかけた。

### 学習の仕方

- 一 前の課と、どんなつながりをもった文か、考えながら学習しましょう。
- 二 親子の愛、友情のよくあらわれているところはどこでしょう。
- 三 自然や人間の明るさ、美しさがどんなに書かれているか、そこを書きだしてみよう。
- 四 題目をなぜ「わか草」としたか、考えてみましょう。
- 五 「愛のこころ」を話題にして、話しあいをしたり、作文に書いたりしましょう。

### (三) 進路

正雄くん。

しばらく会いませんが、元気ですか。こちらは、一同変り  
はありません。どうぞご安心ください。

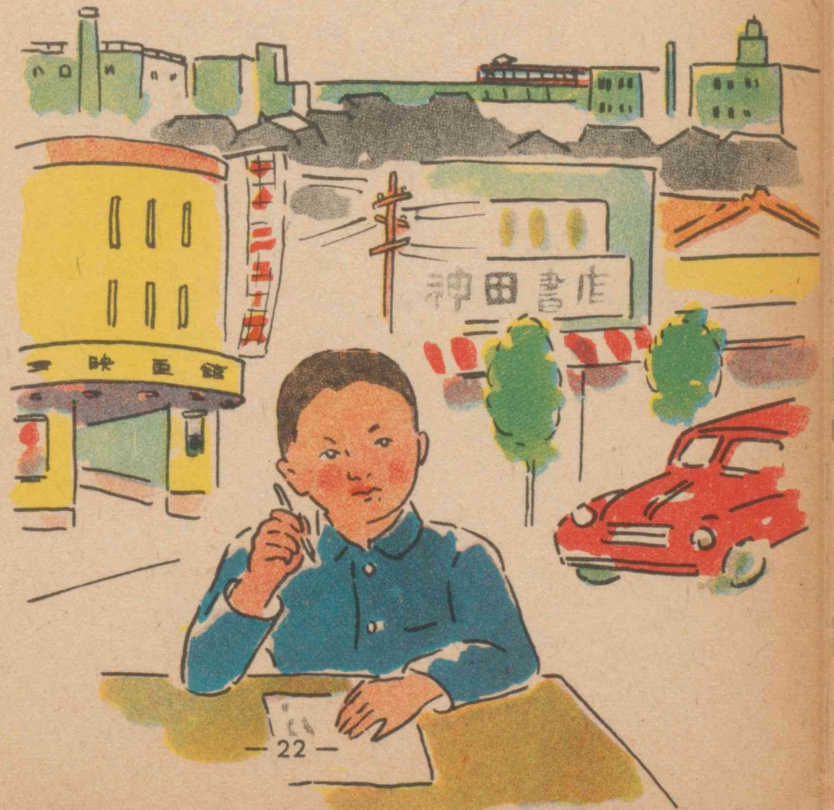
木々は芽をふき、草がもえて、あたたかい日が続くようにな  
りました。田畑の仕事も、おいおいそがしくなってきました。  
した。

おたがいに六年生になりましたね。喜びとともに、新しい  
希望でむねがいつぱいです。それに、上級生としての責任も  
あることですから、ことしこそ精いつぱい努力しようと思っ

ています。

きみのことだから、一年の計画もすでにたて、最後のコースをかけたしていることと思います。それに比べて、ぼくなどはまだできていません。なにかにつけて、どうぞきみの助言をたのみますよ。

さっそくですが、現在、ぼくがはっきり決めかねていることがありますが、これを申し述べて、きみのご意見を聞か



せてもらいたいものだと思います。

このことは、ぼくだけでなく、おそらく、村に生活するものの共通のなやみかもしれません。どうもぼくたちには、社会の進歩的な生活から置きざりをつくっているのではないかという不安があるのです。新聞や雑誌を読んでみても、よきにつけ、あしきにつけて、新しい問題は常に都市におこり、都市によつて解決されていく、村の者はそれをただ遠くからながめているにすぎない。そんな感じがしてならないのです。ぼく自身にしても、学年が進むにしたがつて、きみと会うごとに勉強やものの考え方がおくれしていくような気がしてならないのです。

それに、ぼくたちの村には映画館はおろか、本屋さえあり

ません。きみたちの町にいくごとに、ぼくはうらやましいと思ひ、町に住みたいとも思いました。そんなことだけでも、ぼくたちはおくられているような気がしてなりません。このままの生活が、おとなになるまで続く間には、進歩の差がどんなに大きくなるだろうと思つと、村に生れたことがたまらなくさびしいような気がします。

ぼくは、そのことを父に話してみたことがありました。父は、

「もつともなことだ、わたしも小さいころそんなことを考えたことがある。しかし、それは、考え方しだいではないだろうか。都市には都市の生活があり、農村には農村の生活があるのだ。それぞれの社会によつて、生活の仕方がちがうし、

進歩のすがたもちがうのではないだろうか。おまえが大きくなつて、都市に出て勉強するのはいいが、田に、畑に、山に、水に、木に、勉強することがいくらもあるのではなからうか。」といわれました。

ぼくは、父の気持はよくわかつたように思いました。しかし、勉強することの手がかりがよくわからないので、ずいぶん考えさせられました。このごろ、自分の家を初め、村人の生活に注意しながら考えているうちに、いろいろ心に思い当ることが出てまいりました。

農具一つにしても、これがいかにして生れたものであるか、改良すべき点がないかといった問題もありました。一うねの菜の栽培にしても、土質と肥料、栽培の時期などについて、

研究の余地がずいぶんあるのではないかとも思われてきました。家畜一つとりあげても、広い研究の世界があるように思われてきました。

父にそのことをいってみると、父は、

「気がついたかね、そのとおりだよ。まして、用水池や配水、あれ地の開発、村人の生活様式から村全体の組織に至るまで、改良すべき点は限りなくあるのだ。そして、それらは農村社会の進歩と、切っても切りはなせない問題となっているのだ。」といわれました。

ぼくは、デンマルクのダルガス父子のことを思いだしたり、日本の将来のことなどを考えて、農業や農村のことについて身をいれて勉強してみようかと思ったりしています。また、

農家に生れ、農村に育ったのですから、それが当然のような気持もします。しかし、それにしても、ぼくの都市生活に対するあこがれが、あとかたもなく消え去ったというのではありません。

ぼくがはつきり決めかねているというのは、そこにあるのです。書物一さつ買うにしても、遠い道を歩いていかなければならない。きみの町にでもいかなければ映画もみられない。このような生活をこれからも続けるのかと思うと、なんだかさびしい気がしてくるのです。そういう点では、農村の生活はたえられないような気がするのです。

いよいよ六年生にもなりましたし、学校における毎日の学習は学習としても、それを大きな目標に向けて、一日一日を

送っていくようにしなければならぬと思いますので、いつたい、どうしたらいいものかと考えているのです。

きみが、去年、村の植林を調べにわざわざやってきたことなどを思ひだし、もし、きみにこの方面を勉強していききたいような意志があるならば、ぼくは、どんなに力強い気持がするだろうと思つています。きみとふたりで、同じ目的のもとに勉強することは、また、どんなにか楽しいことでしょう。

ぼくたちには、さらに中学校があり、上級の学校もあるのですが、一つの目標のもとにはつきりと進路を決めて、日々の生活をふみしめていくことが、何よりも大切だと思つてゐます。近いうちに会つて、こんなことについて、きみの考えを聞かしてもらいたいと思います。

村会やPTAの方々の努力で、校庭が見ちがえるほど拡張され、野球もじゅうぶんでできるようになりました。町の友だちをつれて、遊びにきませんか。野球をしたり、今書いたような問題について、たがいに話しあつたら、どんなに楽しく、また、ためになることだろうと思ひます。

豊

### 学習の仕方

- 一 この文をまとめていうと、どんなことが書かれてあるのでしょうか。
- 二 この手紙の書き方について、これまでの手紙の文と比べて学習しましょう。
- 三 正雄の立場からこの手紙に返事を書いたり、この文を中心に話しあつたりしましょう。
- 四 自分の立場から「わが進路」について話しあつたり、作文を書いたりしましょう。
- 五 以上二課をまとめて、「わか草」としたわけを考えて話しあひましょう。



二 スポーツ

(一) ぼくは 捕手だ

ぼくは、  
捕手だ。

打者の後でしゃがんでいる。

九人のものが、

一つのボールを中心に、

固く結ばれて、

自由に、動き走る。



ぼくは、  
協力のとうとさを  
野球で知った。

ボールサインを発すると、

投手は、うなづく。

九人のむねにスイッチがはいる。

投手から飛びだしたボールは、

たちまち生きものになる。

一秒の何分の一で

われわれの生死がきまる。



ぼくは、  
時間のとうとさを  
野球で知った。

とうるい、  
しさつ、  
セーフとアウトに、ごまかしはない。  
一しゅんのためらいも許さない。

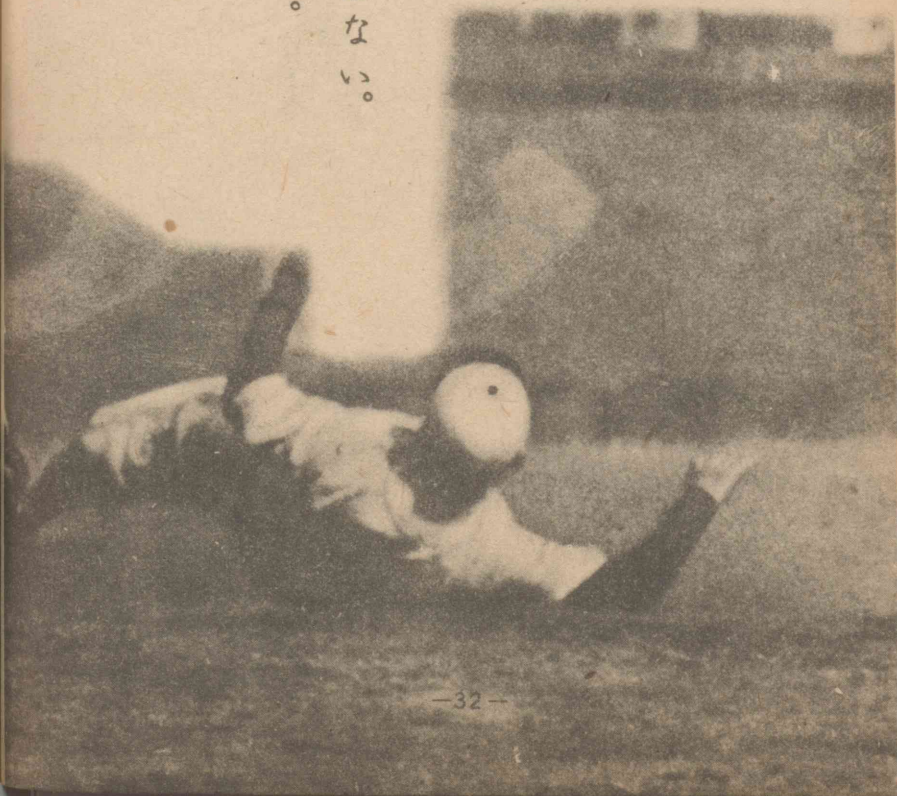
ぼくは、  
グラウンドの扇形せんがたのかなめを

いつもふみしめている。

野球は、  
決断と勇気とを  
ぼくに教えてくれる。

### 学習の仕方

- 一 「スポーツ精神」を中心にここにかかげた四つの課の学習をすすめていきましょう。
- 二 野球の精神と作者の立場について、気をつけながら学習しましょう。
- 三 表現の態度について、気のついたところを書き出しましょう。
- 四 「学習の仕方」二と三の関連について話しあいをしましょう。
- 五 スポーツについて詩を書いたり、作文を書いたりしましょう。



(二) ペリーとぼく

ロンドンといえは、一年じゆう深いきりにとざされてい  
思っている人もあるだろうが、それは冬の間だけである。

三月ともなれば、やわらかな春の光が、冬ごもりで視力の弱  
くなつた北国人をいたわるように、一日ごとに静かにかがやき  
をましてくる。そうして、その春の光をたしかめるように、こ  
う外の畑や、牧場のかたすみの冷えた地表からは、うす紅色ベの  
ルバーブの芽がのぞき初め、地上に春がきたと知ると、急速度  
に成長する。

新開こん地のりんご畑や、すんだ水がゆるやかに流れる小川  
のつつみをそぞろ歩きしていると、どこからともなく、このな  
つかしい季節のかおりがしてくるのだ。

明るい無数のすいせんの花が、生きもののように首をかしげ、  
からだをゆすぶる。春の美しい村、アイルズワスにぼくの住居が  
あつた。ロンドンから汽車に乗って三十分のところである。

この村とウオタルー駅の中間に、ドライブクラブという、テ  
ニスのクラブがあつた。

ルバーブの芽がまだのびきらないはだ寒いある日、日本のテ  
杯は選手のかたがきをもち、その前年から英国のテニス界に少し  
は知られたぼくが、この名もないなかクラブでもよおされる  
トーナメントに出ることになつた。

親しくしていた村の駅長兼改札人きが、クラブの世話人だつた

ので、その顔をたててやるつもりだったのである。

行ってみると、みすばらしいクラブハウスの前に、三四面のコートが、さむざむとならんでいた。

出場者も、一流選手としては、英国デ杯ダブルス代表になったヒューズくらいのもので、ぼくはやすやすと優勝した。

その準決勝の時だった。

予定された時間にコートにつくと、十七、八才のそまつなユニホームを着た少年が、明るいえ顔でぼくをむかえた。

「ミスタ太田、きょうお相手の光栄をもたせていただきませう。」  
ていねいにあいさつしてさしのべたかれの手の力は、意外に強かった。

かれはつけ加えた。

「ぼくは、今までに、ピンボンの英国代表チームに加わって、オーストラリヤに遠征したこともあります。ピンボンは場面が小さくておもしろくないから、テニスに転向したいと思っています。うまくなれそうか、みてくれませんか。」

どこの国でも同じように、英雄崇拜的な子どもらしいあこがれで、この少年も、じつとぼくをみつめるのであった。

えりのよごれたシャツに、せんとくやけのした長ズボンをはき、ラケットも一本しか持っていない。

「ぼくは、今、ある店に勤めています。金がないから学校をやめて働き、ピンボンの練習をしていました。」

「テニスのトーナメントは初めてかね。」

「そうです。ラケットも一本しかありませんから。」

かれは、はりのいいぼくのラケットをとりあげて、えんりよがちにガットをはじめてみた。

その日の試合は、印象に残るほどでもなく、かんたんにぼくの勝利に終わった。

ぼくは、貧しくて熱心なかれのために、お茶をごちそうしてやった。少年の名はペリーといった。

あくる日、ヒューズとの決勝戦にも、ペリー少年は見物にきたので、試合がすんでから、暗くなるまで練習の相手をしてやった。

「ぼくは休みがとれないから、トーナメントにも当分出られないけれど、また、いつかミスタ太田の出られるところに行きますよ。」

強くはないが、一つ一つの打球に、どことなくかんのよさがあり、少し教えれば、相当の選手になるのではないかと思われた。

英国の冬は、きりの中にうずもれる。日本ならば秋晴れにきくの花がにおうところから、この国では、どこからともなく濃いいきりがふき寄せてきて、道をはい、立木をつつみ、大ロンドンをちち色のぬまの底にしずめてしまう。どんなにゆううつなことだろうと思うのはまちがいで、長い二階造りのバスが、ぼんやりときりの中につづいている街路や、セントポールをはじめ、塔や建物の屋根が、ゆめのようにうきだしてはまた消える風景など、わすれがたいロンドンの冬の印象である。

その冬のテニスは、カバード・コート<sup>カバードコート</sup>の電燈の下に展開する。

有名な大学のあるダリジ・カバード・コートには、毎夜多くの日本人が来ていて、その中にベリー少年もまじるようになった。ぼくは、かれが来るたびにその相手になって、数セットの練習をしてやった。かれは、おどろくほど上達した。

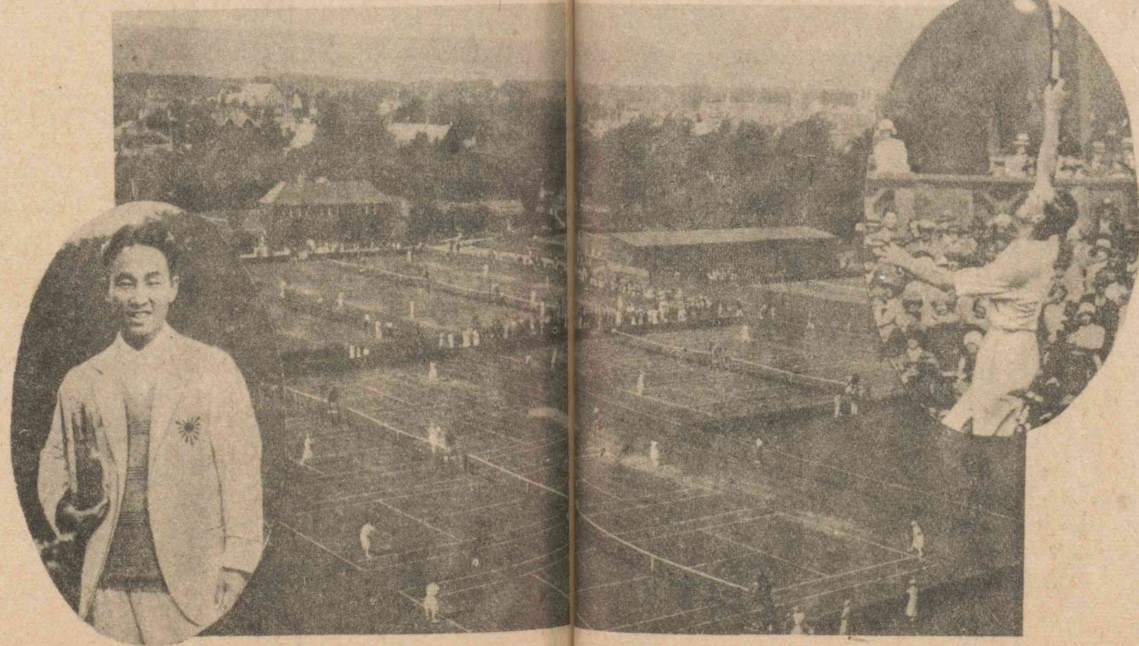
また、それが認められて、テニスをやる時間もめぐまれてきたらしい。負けん気のかれは、そこで国内で不敗のぼくをめざして、根気よく追いかけてまわした。

その後、二年の間に行われた試合で、五度もぼくにいどんで

きたが、そのたびにぐんぐんうまくなってきた。そして、敗れるたびに、「こんどこそ」といった。しかし、その「こんどこそ」はなかなかきそうもなかった。

英国の夏はまた楽しい。緑のおか、青い空、暑からず、うっとうしからず、五六月ともなれば、ライラックのかおりにむせかえる。この国特有のしばのコーストの試合は、六月の初めに始まるのだが、この時もベリーと顔をあわせることになった。

「ミスタ太田、ぼくはきのうのぼくじゃないですからね。」



コートで握手する時、かれはこういいながらはりつめたえ顔で、二年間めざしつづけてきたぼくの目をみつめた。

はたしてかれの奮とうはものすごく、ぼくは第一セットをとられ、あぶないところてようやく勝った。

試合後、かれは、ぼくがお茶にさそつたのもことわり、しばふの上にねそべつて、青い空を見上げていた。

「ペリーくん、来年のぼくは、またことしと同じじゃないからね。」

じょうだんにいったぼくのことばに、かれはこたえようともしないで、じつと空をみつめていたのであつた。

その秋、ぼくは四年ぶりで日本に帰つた。ぼくに代つて、二人の選手が英国に渡つたが、ペリーは、日英テ杯対戦で、わが



チームを完全にうち破つた。

やがて十数年ぶりにデ杯をアメリカからうばいどつたかれの名は、無敵のテニス王ペリーとしてかがやくにいたつた。

### 学習の仕方

- 一 前の課とのつながりを考えながら学習しましょう。
- 二 まとめていうと、どんな話か書いてあるか、短かい文に書いてみましょう。
- 三 この文のどこにスポーツ精神があらわれているでしょう。
- 四 ペリーの気持ちについて、話しあひましょう。
- 五 「スポーツの種類とその精神」を話題として、話しあひましょう。

(三) 人馬ともに

昭和七年、ロサンゼルスで開かれたオリンピック大会に参加した日本選手は、いづれもりっぱな競技ぶりを示して、各国の人々に快い印象をあたえた。

アメリカの新聞では、

「日本は、西洋からスポーツをとりいれてからまだ日が浅い。

その日本が、こんどわれわれにスポーツの何ものであるかを教えた。」

とほめた。さらに

「この大会で、われわれは、日本および日本人をよく知ること

ができた。かれらの真けんなスポーツマンシップを見て、以前にもましてかれらを尊敬する念を禁じ得ない。つまり、第十回オリンピックは、日本人によつて生かされた。スポーツの真髓まごころをかれらから教えられた。」

と、さん辞をかかけた。

とくに各国の人々に感動をあたえたのは、馬術競技で、城戸選手が、野外馬術の最後のしょうがい三十五番めで、ついにき権した時の情景であつた。

八月十二日、城戸選手は愛馬の久馬きうまに乗つて、二十五マイルのコースをかけた。各種のしょうがいをいくつもいくつも征服し、ダブルジャンプの難関を乗りきれば、あとは、最後の高ししょうがい一つである。



場内の人たちは、このみごとな競技にさんたんをし、おそろく優勝するであろうと、その妙技みぎに見とれていた。

ところが、久馬は、今までいくたびかのかけあしや飛びこえなどで、すっかりつかれきつていた。苦しそうに息をあえいでいた。

あと、わずか四フィート六インチのしようがい物である。かれが一むち久馬にあてれば、おそらく、ここを突破とくしたにちがいない。しかし、むちは動かなかつた。

馬はしようがい物の近くまできて、びたりとどまった。

久馬の全身は、あせてぬれ、こきゅうはずんでいた。

城戸選手は、だまって馬からおりた。そうして、コースの外に久馬を静かにひいていつて、やさしく首をたたいた。

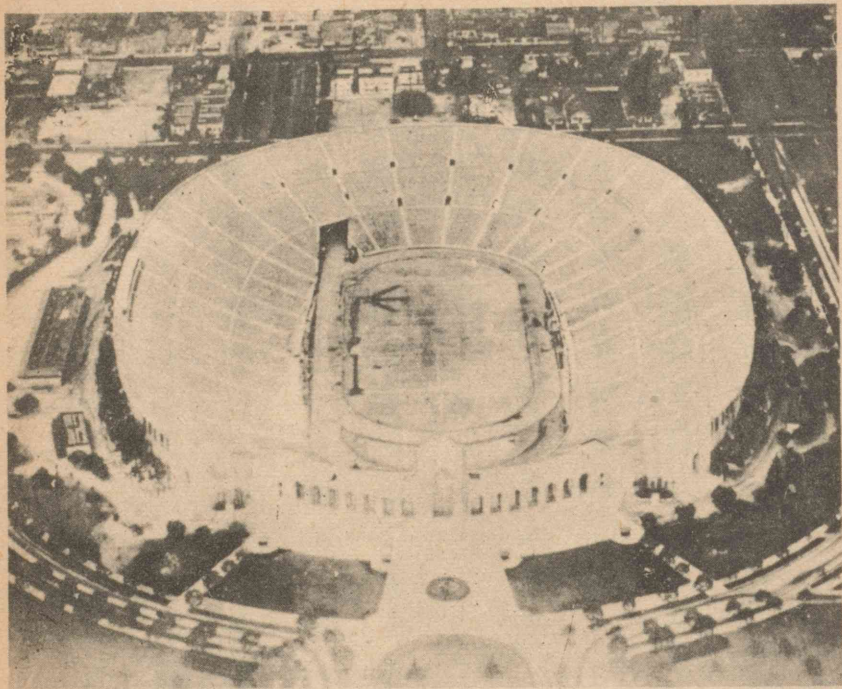
かれは、につこりとわらつて、久馬の耳もとに、いたわりのことばをかけた。

久馬は、鼻づらをかれのかたにあてた。

かれは、自分にわびている久馬をいたわりながら、男らしくその場をひきあげたのであつた。

### 学習の仕方

- 一 前の課とのつながりを考えながら学習しましょう。
- 二 この文を見なくても話ができるようにしましょう。
- 三 この文で、スポーツ精神のよく表われているところは、どんなところでしょう。
- 四 この文を読んで、心をうたれたことを文に書きましょう。
- 五 「スポーツとその価値」について話し合いましょう。



時中止されたということである。  
 この大会は、二千七百余年のむかしから、十一世紀にわたってつづけられた。  
 近世オリンピックは、十九世紀の終りに、フランスのピエール・ド・クーベルタンの計らいで、世界の平和と文化の向上のために再興されたもので、一八九六年ギリシヤのアテネで第一回大会が開かれ

オリンピック競技には、古代のものと近世復興のものとの二つがある。

古代オリンピックは、ギリシヤ古代の祭典の一種で、それは四年に一度ずつ開かれ、その祭典競技の行われる一か月は、各方面に平和が宣伝され、たとえば戦争があつても、その戦争が一

(四) オリンピックの思い出



て以来、今日におよんでいる。

かくて、第二回パリ、第三回セントルイス、第四回ロンドンと行われたが、わが国とは全く関係はなかつた。第五回のストックホルム大会以後、毎回選手を送るようになったものである。日本のオリンピック参加を思いついたのは、嘉納治五郎である。かれは、柔道の完成者として、内外に信望の高い具眼の士であつた。

第五回のオリンピック大会に、日本にも参加の招きが来ると、かれは大日本体育協会を作り、一九一一年の七月、この予選会を開いて、短距離では三島、マラソンでは金栗のふたりが、初めての日本選手として、ストックホルムに派けんされることとなつた。

その入場式の日、ストックホルムの会場を一周する二選手の、さびしい、しかしどうどうたるすがたを想像してほしい。

競技の結果はおもわしくなかつたけれども、これによつて国民のオリンピックに対する関心が初めて生じ、各種競技の練習がさかんに行われるようになってきた。

一九二〇年、ベルギーのアントワープに第七回大会が開かれると、日本からは、陸上十名、水上二名、庭球二名の選手が送られた。記録としてはまだ列強に比することはできなかつたが、水泳で内田、斎藤のふたりが奮戦し、後年水上日本の活躍の基をつくり、熊谷、柏尾の庭球選手は、単複ともに決勝戦までこぎつけ、日本庭球の名を高めたのである。これから、デビス・カップ戦に出場するようになった。

一九二四年、パリ大会には、陸上八名、水上六名、庭球四名、レスリング一名を派けんした。その成績は、陸上で織田幹雄が三段とびに六位となり、参加以来初めての貴重な一点をかち得た。

水上では、高石勝男らがおおいに活躍して、日本の水泳が世界的レベルへ躍進するのに、大きな足跡を残した。

一九二八年には、アムステルダムで行われた。

参加国は四十七か国、オリンピックが始まって以来のさかんな大会で、日本は、陸上、水上、そう艇、けん闘、レスリング、馬術に四十三名を送った。また、その数は多いとはいえないが、回をかさねるごとに、オリンピックに対する国民全体の関心が強くなったことを、うかがうことができる。

まず、陸上で、三段とびの織田選手が、一五メートル二一をとんで優勝し、初めて日本国旗をメインマストに高くかけた。次に、水上でも鶴田選手が二百メートル平泳で優勝して、二分四八秒八の記録をつくったが、



この時、かかげるべき日本国旗の用意がなくて、選手の持っていたものをかかげたというエピソードがある。

女子も陸上に参加して、人見絹枝が八百メートルに第二位となり、日本の女性がスポーツ界に進出するいとぐちをつくった。初めは、いわば、参加したというだけにすぎなかったものが、

はやくも世界の一流選手とかたをならべるようになり、日本も  
ようやくひとり立ちができるようになってきた。

こうした時に、第十四回大会が、アメリカのロサンゼルスで  
開かれた。

日本からは、選手一三一名、役員六九名という多人数の団  
体が送られた。その中には、十六名の女子選手もまじっていた。  
選手の意気はさかんであった。はたして、男子競泳では六種目  
の選手権をとって大勝、陸上では三段とびの選手権をにぎり、  
その他ぞくぞくと入賞して第三位、馬術競技の大しようがいも  
優勝し、また初出場のホツケーも第二位を得、その他のものも  
ふくめて、全体として第六位に進出したのであった。

この年、冬期オリンピックにもスキー十一名、スケート六名

の選手を送ったが、まだ対等に  
争うことはできなかつた。

一九三六年、第十一回大会が  
ベルリンで行われ、日本は二四  
七名という、参加以来最も大き  
な選手代表団を送った。なお、  
冬期大会にも四七名が送られた。  
この年、水上競技を初め、日  
本の實力はいかなく発揮され  
て、世界の注目をあびた。

まず、水上では二〇〇メート  
ル平泳に葉室、一五〇〇メート



ルに寺田が優勝、また八〇〇メートルリレーにすばらしいレコードを出してこれも優勝、さらに女子二〇〇メートル平泳では前畑の優勝などがあつて、世界に水上日本の名をあげた。

この時、日本のアナウンサーが、前畑、ゲネンゲル両選手の大接戦のようすを伝えるに当り、そのかみつくような力強い放送は、本国の人々を熱狂させ、「前畑、がんばれ、前畑、がんばれ。」の声は、今も人の耳に残っている。

三段とびでは、田島選手が十六メートルをとんで世界記録をつくり、原田選手が第二位をしめ、ついに三連勝をうちたてた。ぼう高とびの西田、大江の両選手が、アメリカの選手と大接戦を演じたこと、また、村社選手がフィンランドの選手と最後まで奮戦して、その不屈の精神を世界に示したのも、わすれが

たい思い出である。

われわれは、こうしたすぐれた先ばいの努力と精神を受けついで、ますますスポーツをさかんにし、新しい日本の建設に寄与したいものである。

### 学習の仕方

- 一 オリンピックの由来と、意義について考えながら学習しましょう。
- 二 日本のスポーツの発達のすがたを、この文から拾いあげてみましょう。
- 三 この文を読んで、日本のスポーツについて考えさせられたことを書いてみましょう。
- 四 世界スポーツにおける日本の位置について話しあつたり、書いたりしましょう。
- 五 オリンピックの精神について話しあいをしましょう。

### 三 現実を追って

#### (一) 実きよう放送

このごろ、ラジオでよくスポーツの実きよう放送があります。すもうとか、フットボールとか、野球などのようすが、手にとるように聞えてくるので、それを聞くものは、受信器のそばで、喜んだり、がっかりしたり、時には熱狂<sup>まじ</sup>することさえあります。いつぞや、アメリカチームと日本の東軍チームとの野球の試合が、東京の神宮球場で行われた時、その実きようが放送されましたが、あの放送の印象は今でもはつきりと思いだされます。六回まで両軍とも得点はありませんでした。どちらの投手も

調子がよく、ほとんど打げきをふうじてしまつたからです。

七回、八回――、おしくも日本の東軍チームがミスで四点をあたえ、ついに四対ゼロのスコアで終つたのでしたが、あの熱戦の放送ぶりは興味の深いものでした。

午後七時半から、九時半ごろまでの夜間に行われ、グラウンドは五百万しよつ光のサーチライトに照らされてはいましたが、日中試合の情景とはまたちがつたふんいきがかもしたされたことでしょう。また、ゲームがか



わるたび、ブラスバンドの演奏もあつて、いやがうえにも気分  
のもりあがるようすが、ラジオですらよく聞きとることができ  
ました。

いったい、実きよう放送は、むずかしい仕事にちがいありま  
せん。アナウンサーは、観衆といつしよになつて、その競技を  
こまかに見なければならず、しかも、それをつぎつぎとマイク  
ロホンを通じて、何百万の聞き手にこれを伝えなければなりま  
せん。自分だけが、おもしろいと思つていたのでは、その使命  
ははたされるものでなく、聞く人みんなに「なるほど」と思われる  
ように、生き生きと報道する必要がある。

野球試合の妙技にみとれていたのでした。はいへんです。といつ  
てまた、自分だけが、かつてに、いらぬことまでしゃべりた  
ててはなおこまります。見ていて競技におぼれず、また、あま  
りひややかにもならず、目に見えるように情景を伝えてくれる  
かねあいが、おそらくアナウンサーの苦勞するところだと思わ  
れます。

このかねあいを、アメリカ対東軍野球放送にうかがうことが  
できました。

神宮球場の夜の風景を報じたこともよかつたし、どうせんさ  
わぎたてる観衆の声をとらえたことも効果的でした。とくに、  
ボールを快く打つた時、その音をよく聞かせておいて、説明を  
手ぎわよくしてくれたので、その場所についてこれを見るような  
気持に何度もさせられました。

ロサンゼルスで全米水上競技会が開かれた時、これに参加し



た日本水泳選手の活躍<sup>てつやく</sup>ぶりを伝えてくれた、あの実きよう放送も生き生きと心に残っています。

まず、あのはるかに遠い国で行われている水泳競技のありさまが、それといっしょに、われわれの耳にひびいてくる放送の技術におどろくとともに、その報道の苦勞もなみたいていではないと思いました。

あの時、日本の放送といっしょに、アメリカでも放送しました。これを聞いていた人の話によると、その放送の仕方がなかなかいきどいたものであったということでした。

たとえば、選手たちのスタートのようすも、だれの飛びこみ方が高いとか、低いとか、すばやく、しかもくわしく報道されたそうです。

そのいい方が、おもしろく、いかにも見ているような気になったともいつていました。

「ブルハシ（古橋）が見えない。どこへもぐりこんだのだろう。」

あ、うかびました。

頭をあげたら、早くも先頭に泳いでいます。」

といったように、かん潔で明快なのです。

「なんとふしぎな泳ぎ方だろう。うでの回転がすばらしく速い。まるで水車のようだ。」



あしは、これに輪をかけたように速い。

うでが二回ストロークするまにあしは六回動いている。  
速い、速い。

うでの水車、

今、その速さを数えます。聞いてください。

一、二、三、四、……………」。

このようなことばを聞くと、思わず、あのしぶきをたててク  
ロールで泳いでいる選手のすがたが見えてくるではありません  
か。

このアナウンサーは、ひとりの人だけに心をうばわれてはい  
ない。すぐ、ジョーンズのようすを報道します。

「ジョーンズの泳ぎ方をみましょう。」

うで、二回に対し、あしは四回、

うでの速さは、フルハシに比べてめだっておそい。

数えてみよう。

一つ、二つ、三つ、……………」。

この数える速さの差によつて、古橋のいかに速いかが、よく  
示されるのであります。

このアナウンサーは、ユーモラスなことばをわすれない。

「フルハシがトツプ・ギヤーをいれた。」

なんとという速さだろう。

トビウオ (飛魚)

フジヤマノトビウオ (富士山の飛魚) ——」。

息づまるようなこの競技の光景の中に、こうした、おもしろ

い思いつきはさむために、いつそう聞くものの想像がかきた  
てられてくる。それかと思うと、あたりのようすをとらえ、観  
衆の熱狂をじかに聞かせて、聞くものの心をひきつけてしまう。  
「ちよつとみなさん、

場内のこのさわぎ方を聞いてください。」

あらしのようなはく手、こうふんした観衆の声。

「ゴールに近い、

ものすごいうでのピッチだ。

この水車から世界記録をうみだせ、

はく手のあらし、

ゴールイン——。」

熱しきつた、はりつめた心をしずめるように、着順を報道す

る。つづいて、正確にレコードを放送する。おしまいに、アナ  
ウンサーは、次のようなことをいったそうです。

「わたしは、あまりに説明、報道に力をいれすぎて、偉大な選  
手にはく手をおくるひまがありませんでした。

で、今、はく手をします。」

ここで、ただひとり、パチパチパチと、自分のはく手をおく  
りました。

わずか、一つのこのしぐさではありますが、なんと人間らし  
い、生きた動作でありましょう。とかく機械的になりやすい実  
きよう報道者が、こうして何万の観衆を前に、自分ひとりの、  
心からなる感げきを選手に示すことが、なんともいえないあた  
たかい人間味があふれているように思うのです。

聞く人の身になって報道する——ことが、実きよう放送にあ  
たつては、だいな心がけだと思われます。  
これは、実きよう放送だけにだいなことではありません。  
ふだん、話をする時にも、また作文を書く時にも、わすれては  
ならない心がけだと思ひます。

### 学習の仕方

- 一 実きよう放送をするのに、最もたいせつなことはどんなことでしょうか。
- 二 この文の中で報道のうまいと思つたところを書き出しましょう。
- 三 この文の、終りの三行について考えをまとめ、文に書きましよう。
- 四 実際に実きよう放送を聞いて、それを中心に話しあひをましよう。
- 五 「ラジオの番組」を話題として話しあひをましよう。

### (二) ニュース

暗いところを歩いていくと、なんとなく不安な気持がするも  
のである。ふだん歩きなれたところでも不安であるから、まし  
て初めて通るようなところは、いつそその感が深い。  
あたりのようすがわからないと、自分でかつてにおく測した  
り、想像したり、思ひこんだりして、いかにもそれがほんとう  
のように思われてくる。

われわれの日常生活でも、もしまづたく周囲のできごとを知  
ることができなかつたら、どんなに不安を生じるであらう。人  
間には、自分の住んでいる周囲に起るできごとを知りたい本能

がある。ニュースを、少しでも早く知りたいという欲求がある。おちむかし、人間が部落生活をしてきた時から、自己を安全に守るために、どれほど、ニュースを知ることにはねをおったか知れない。

「ことば」の発達も、ここに根ざしているともいえる。「ことば」ほどニュースを伝達するのに便利であり、正確であるものが、ほかにはないからである。しかし、たとえ「ことば」があつたにしても、ニュースを伝える範囲は、たいへんせまかつた。「おふれ」や「うわさ」の伝わる地域は限られているからである。

その後、文字が発明されて、これを用いるようになってからは、ニュースを伝える範囲は、はるかにひろめられてきた。ひろめられてはきたが、板や紙に書いたのでは、それを人々に示すことも、一まいずつ配ることもたやすくはない。その伝達の範囲もやはり限られたものである。

ところが、一たび印刷術が発明され、通信・交通が発達してくると、ニュースの伝達の範囲はにわかにはひろめられていった。これが新聞の発生となり、今日のように重要な報道機関となつた。これにつづいて、ラジオの出現となり、ニュース映画の製作となつた。

今後これらのものが、科学の進歩とともに、いかに発達するか、もとより想像することができない。

さて、一口に「ニュース」ということばを使っているが、この「ニュース」とは、はたしてどんな性質をもっているものであろうか。

第一に、実際に起つた事件を知らせなければならぬということである。

どんなにおもしろいことでも、かつてに作つたことや、想像したものでは、ニュースにならない。その伝えることは、ほんとうにどこかであつた事件でなければならぬ。

第二に、ニュースは、だれでも知つてゐることでは価値がないといふことである。

たとえわれわれにとつて重要なことでも、ふだん見なれていたり、聞きなれてゐるようなことでは、ニュースにはならない。たとえば、朝になると東から太陽がのぼるといふようなことや、夕べになると西の空にしずんでいくといふようなことは、考えてみれば大きなできごとにはない。しかし、毎日同じよう

にくりかえされるものであるために、この天文現象は、ニュースにはならない。

同じ自然現象でも、思いがけない地震とか、台風とかいうものになれば、これはたちまちニュースになる。

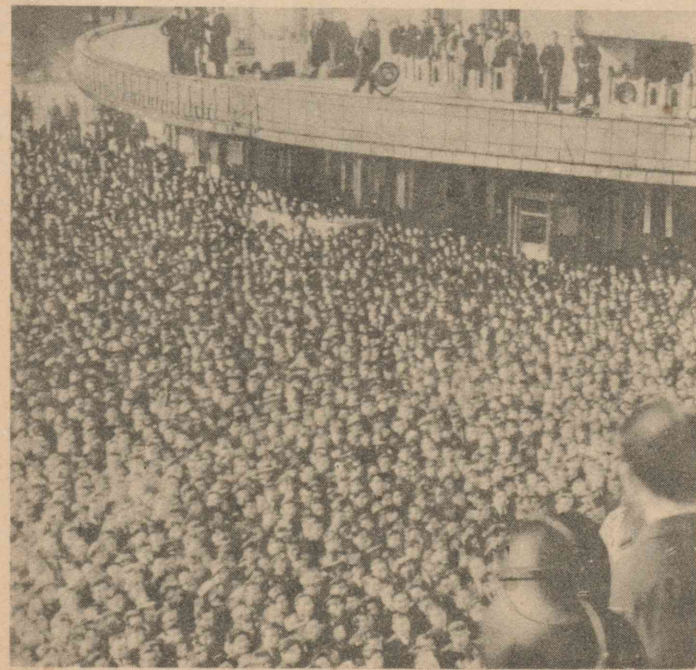
第三に、ニュースは、時間的に新しいことではなければならぬ。

ある事件が、いかに興味あるもの、めずらしいものでも、遠く過ぎ去つたことであれば、ニュースにはならない。

ニュースは、最近にとつたものほど価値が大きい。したがつて、時間がたてば、それだけニュースとしての価値がどんどんさがるから、それをやく知らせるために、なみなみならぬ努力が続けられている。

第四に、ニュースは、地域をこえて事件の重要性に関心を持たなくてはならないということである。

同じできごとでも、近いところて起きたもの、身ぢかにあつたことほど心がひかれる。だから耳をかたむけることになるのだが、遠くはなれた土地に起つたことであれば、いかに事がらが大きくても関心がうすくなる。直接に関係がないからである。しかし、世界の一部に起つた事件でも、



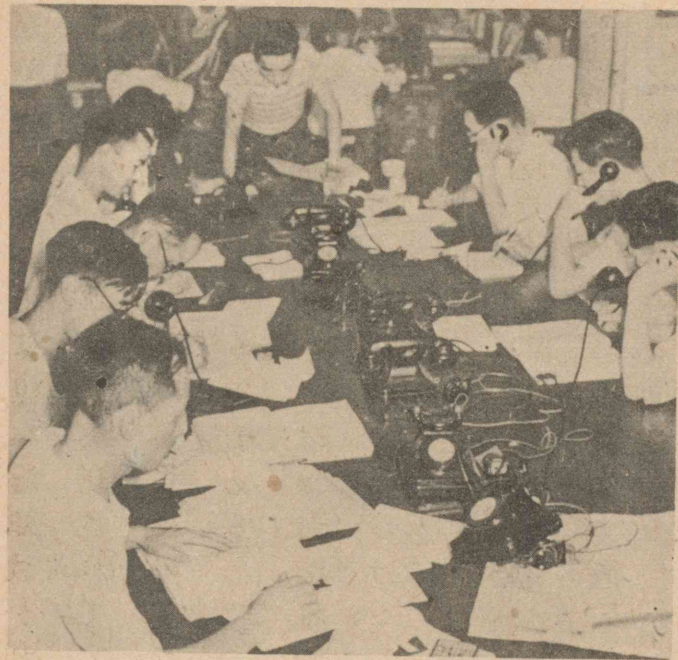
それがただちに身边にひびくものもある。したがって、すべての交通・通信の機関を利用して、それを確実に伝えるために、たゆみない努力が続けられている。

第五にまとめていうと、ニュースは、なにが、いつ、どこで、どのように起つたか、聞く人の身になって正確に語ることである。

新聞、ラジオ、映画などによつて提供されるニュースには、このような価値・条件がじゅう実していなければならぬ。

毎朝配達されてくる新聞は、わずか一二まいの印刷した紙にすぎないが、ここまでに仕上げるには、なみたいていではなく、どうてい五人や十人の手でできるものではない。

いつたい、事件というものは、犯罪に限らず、いつ、どこで、どんなことが不意に起るか、それは全く予想のできないものである。



そのために、国内といわず、国外といわず、おもな都市には通信員を常置して、ニュースを細大となく集める用意をしている。いわゆる通信網を張って、もれなくニュースをとらえようとしている。

そうして、とらえたニュースを急送するために、写真電

送や電話はもとより、超短波が利用される。

こうして各地から急送されてくる貴重なニュースを受けとるために、新聞社では、昼夜の別なく、年から年じゅう、その触手を働かせているのである。

集まったニュースは、新聞社内の編集部で、これを整理し、見出しをつけたり、わりつけをしたりして印刷部にまわす。

印刷部では、これをすぐ活字にくみ、紙型をとり、輪転機という高速度印刷の機械にかけ、刷りあがったものは営業部に送られ、各家ごとに配達されていく。

われわれは、新聞のおかげで、周囲のできごとが一目にして理解できるばかりでなく、遠く諸外国に起った重大な話題や事件なども、容易に知ることができる。



新聞とは伝達の方法を異にするが、ラジオもまた、ニュースの報道に大きな役わりをはたしている。

新聞では、文字によつてニュースが書かれるが、ラジオでは音声を用いて話される。

新聞では、ニュースを目で読みとり、ラジオではそれを耳で聞きわけける。

放送局のアンテナから放たれる電波が、一分間に数十万回というものすごい回数でしん動しながら、四方にひろが



つていくということや、その速さが、一秒間に地球を七まわり半もするということなどを思えば、おどろくべき速さで広く報道されるわけである。実きよう放送のように、できごとと同時にこれを一ぱんに報道し得ることは、ラジオ独特の強みである。放送すべきニュースが決定し、これを放送するまでには、いくたの手数をかけなければならぬことは、新聞を印刷にかけるまでの手数と同様にこみいったものである。

新聞にしても、ラジオにしても、もはや、われわれの生活上欠くべからざるものとなつてはいるが、事件そのものを、ありのままに示してくれる点では映画におよばない。

映画は、あるできごとを、そのまま銀まくに再現して見せてくれる。静止した写真などでは、どうしても表わすことのでき

ない情景を、生き生きと伝えてくれる。その上に、文字や音声では十分に表現されない事件の、複雑な関係やび妙な空気を直接に伝えてくれる。

したがって、ニュース映画を見ると、ちようどその現場に立っているかのような実感をもつ。しかも、見たい、聞きたい、知りたいと思うとおりにカメラが追っていつてくれるので、その感はいよいよ深い。

ニュース映画は、事件を動的に実写するばかりでなく、そこに起るいろいろな音響や陰影を、同時に伝達する。

たとえば、大火のニュース映画は、燃えあがるほのおやけむりとともに、家のたおれる音や、わめきさけぶ人の声などが、耳に直接ひびいてくる。

われわれは、この映画を見ることによつて、そのできごとをあたかも目の前に見るような感じをもつ。これほどわかりやすく、これほど現実を伝達してくれるものは、ほかにはない。

映画の進歩は、これに天然色を加えることになつたが、さらに、においをもなうようになるかも知れない。立体感を表現するようにもなろうし、明るいつころでも見ることができるようになるであろう。

こうなると、映画の伝達力は、いよいよ効果を發揮して、われわれのニュースに対する満足と喜びとを、豊かにあたえてくれることになる。

ラジオの改良されたテレビジョンも、急速に進出してきている。これは、ニュース映画によく似ているが、その伝達の仕方

では、映画よりいつそう短時間で、われわれに示されることになる。実きよう放送が行われると同じように、現場の情景がこつこくと伝えられるからである。

このようにして、ニュースを知りたいという人間の本能が、その伝達の方法を、どれほど進歩させるか想像がつかない。また、今までは、遠いところや、きりのかかったところは、見とおしがつかなかつたのであるが、レーダーの発明によつて、この不安が除かれ、標識燈が設けられて安全な方向が照らされるように、新聞、ラジオ、映画などは、人間の欲求によつて、どれほど改良されるかわからない。

もし、よきニュースが伝われば、ともに喜び、悲しいニュースがあれば、ともにいたわりはげまし、たがいに理解しあい、助けあつて、たのしい生活をつづけていきたい。これが一国だけではなく、世界の人々が正義によつて、親愛の情をもち、平和を愛し、より高い文化を築きたいものである。

### 学習の仕方

- 一 前課どのつながりを考えながら学習しましょう。
- 二 この文はニュースの何について書いてあるか、いくつかにまとめてみましょう。
- 三 ニュースの必要、性質、方法などをかき書きに書き出してみましょう。
- 四 この文の書きあらわし方について考えてみましょう。
- 五 「このごろの最大のニュース」を、実際に例をとり、この文と照らしあわせてみましょう。
- 六 「新聞、ラジオ、映画の共通性と相異性およびその価値」について討議しましょう。

四 燈台島

(一) 海はよぶ

ふけよ、朝風  
どとうをこえて、  
ほづなしほれば  
日があがる。

海は、よぶ、

よぶ。

海がよぶ。

いけよ、あら海、  
光をあびて、  
船はゆりかご  
ほが歌う。

海は、よぶ、

よぶ。

海がよぶ。

たてよ、海の子、



しぶきとともに。  
 波は世界の  
 手をつなぐ。

海は、よぶ、  
 よぶ。

海がよぶ。

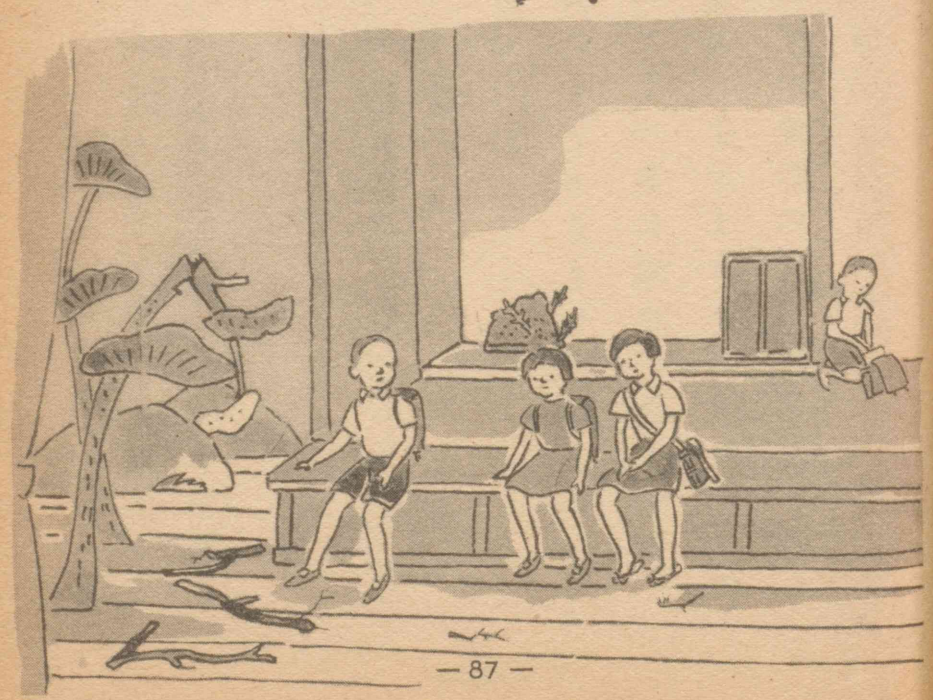
学習の仕方

- 一 どんな気持を歌った詩でしよう。
- 二 詩の調子が、どんな組みたてになっているか、細かに調べてみましょう。
- 三 調子をととのえて、詩をかいてみましょう。
- 四 海に関する詩歌を集めて、話しあいをしみましょう。

(二) 燈台島

人  
 市川 保・山村ハツ (六年生)  
 小島正市 (五年生) 中西ミノ  
 竹田次郎 (四年生) 大月銀二  
 三島ユキ (三年生) ミノの弟  
 三男 (二年生) 西村カツ (一  
 年生)

時 所  
 燈台島の高台にある銀二の家



ある夏の、あらしの過ぎた朝。

上手に、燈台守大月の家の庭に面したざしき。もとは、このざしきだけが燈台守一家の住居であったが、このざしきに続いて本屋ができたので、今では銀二の勉強べやになっている。上手の柱に電話がとりつけてある。床の間に本ばこ。

下手、二三本のまつの木。ここから海を見おろすことができる。

えんがわに、ユキと三男とカツがこしをおろしている。三人とも学校にいくしたくをしている。銀二はざしきでかばんに本を入れている。

波の音。

声 「本土の、あるみさきから、声のとどきそうな所に小さな島がある。島の名はわからない。その島に燈台が建てられてから、だれいともなく燈台島とよぶようになった。島には燈台守一家と、二十戸足らずの漁師の家族が住んでいるだけである。島の人たちは、買物をするにも、その外の用

をたすにも、みさきの村まで船でいくのである。子どもたちも、当番の漁師に送りむかえされて、みさきの分校に船で通っている。これはある夏の、あらしの去った朝のできごとである。」

波の音続く。

ユキ (正面をさして) あら、あんな所にぼうしが――。

カツ どこに。

三男 ほんた。ほら、あのまつのえだ――。銀二さん、だれのだろう、あの麦わらぼうしの迷子まいご。

銀二 ああ、あれはおとうさんのだ。ゆうべのあらしでふき飛はされたのだな。

三男 ぼうしくらいならまだいいよ。うちでは、ふる場のトタ

ンを持っていかれたんだから――。

カツ うちだって竹べいがたおれたよ。こわかったな、ゆうべは――。

三男 ないたんだらう、カツちゃんは――。

ユキ あのくらいのならして、ないたりなんかしないわね、カツちゃん。それより、三男さんはどうだったの。

三男 停電になっただらう。あの時、ちよつとこわくなって、ふとんにもぐりこんだよ。

みんなわらう。そこへ、ハツと次郎が下手から来る。

ハツ おはよう。

みんな朝のあいさつをする。

銀二 次郎さん、船は――。

次郎 それがね、区長さんがきょうは休んだ方がいっていいんだよ。

銀二 どうしてだらう、このくらいの波なら――。

三男 いけるよ。けさだって、島谷のおじさんがみさきにわたつたんだもの。

ハツ あれは特別のご用よ。区長さんが心配していつてくださるのだから、きょうは休みましょう。

三男 いやだ。いきたいよ、学校に――。

ハツ 三男さんだけではないわ。だれだって休むのはいやよ。でも、しかたがないでしょう、この波では――。

銀二 保さんはどうしたの。

次郎 まだ区長さんの家にいるよ。あとから来るって――。区

長さんの所、いっばいだね、みんな集まっつて――。

三男　ね、正ちゃんのおとうさんの船、流されたんだろう。もう帰ってこれないだらうな。

ハツ　そんなこと――。まだ、ようすがわかっていないのだから正ちゃんなんかについてはだめよ。さあ、きょうはここでいっしょに勉強しましょうね。銀二さん、あがらしてね。

銀二　うなずく。みんなざしきにあがる。

ハツ　勉強のすんだ人は、銀二さんから本を借りて読んでもいいことにしましょうね。

次郎　ぼくは作文にしよう。

ハツ　それでは、三男さんの勉強をみてやってね。それから、

三年の銀二さんとユキちゃんは算数。四十ページだったでしょう。カツちゃんは、きのう先生から習った、あの  
続き。

次郎　三男くん、国語の本を持っておいでよ。

カツはハツのそばに、三男は次郎のそばに行く。

銀二　（しばらくして、ハツに）　けさのニュースを聞いた。

ハツ　ええ。

銀二　方々で漁船がそう難したつてね。電話が故しようでなかったら、みさきのようすがわかるんだけど――。

ユキ　島谷さんが帰ってきたらわかるわ。ねえ、ハツちゃん。

銀二　おとうさんは燈台のひを守って、どうとうけさまでねむらなかつたよ。



次郎 どうしたかなあ、正ちゃんのおとうさん。帰ってきてくれるといいんだけど――。

ハツ 帰るわ、きつと帰って来るわ。さあ、もうだまって勉強しましう。

銀二のつくえに集まる者、床の間をつくえの代りにする者、えんがわて本を読む者、それぞれ勉強を始める。波の音。

保が下手からいそぎ足て来る。

保 おはよう。

一同 おはよう。

保 ハツちゃん、ちよつと――。

保は、ハツを下手のまつの木そばまでさそう。

保 (小声で) 正ちゃんをむかえにミノちゃんにいつてもらった

よ。もうすぐここに来るだろうから、みんなで元気をつけてやってね。

ハツ ええ。

保 なるたけ、おとうさんのことはいわないようにしてね。

保はざしきの方へもどる。ハツは下手の方を見ているが、正市をむかえる気になって去る。

保 銀二くん、電話が通じるようになったら、すぐ知らせてくれつて、きみのおとうさんからことずかったよ。ちよつと今調べてくれない。

銀二 (電話のそばによって、受話器を耳にあてる。) もし、もし……、もし、もし……。

次郎 保さん、けい報のけいという字、どんなに書くの。

(指で大きく書きながら) 敬という字の下に言う。

次郎 あ、わかった。ありがとう。

保 (銀二に) どう、やっぱりだめ。

銀二 さつきと同じで、ポコポコい  
うだけ——。

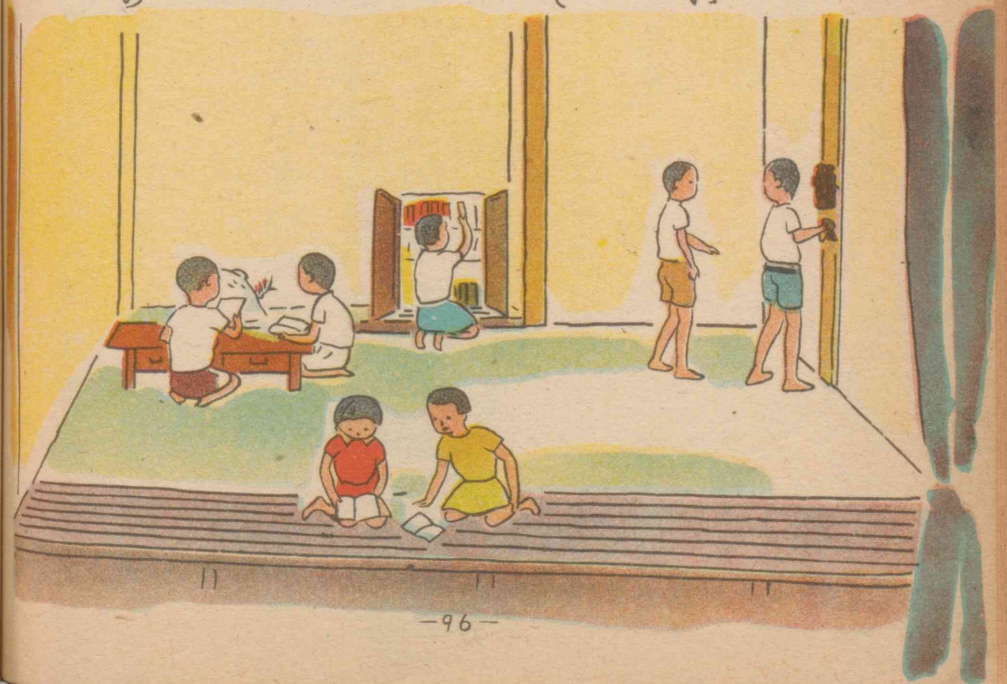
保 それじゃ、あとで時々かけて  
みてね。

保が下手にいきかける。そこへ、ハツが走ってもどつ  
て来る。

ハツ (海の方を指さして) 保さん。船よ、

島谷の船よ。

保 えっ、島谷の—— (ど、まつの木の  
そばにかけよる。)



ハツ ほら、そこに——。

保 (船を見て) よし、ぼくははまにいつてようすをきいてくる。  
あとのことをたのんだよ。(ど下手に走って去る。)

ざしきで勉強していた一同が、ハツのまわりに集まってくる。

銀二 ずいぶんゆれているなあ。

ハツ そうよ。あの波ではわたれないわ。

三男 平気だ、あのくらい——。

カツ 私だって平気よ。

三男 いきたいな、学校に——。おーい。

カツ おーい。

三男 だれをよんだのだ、カツちゃんは——。

カツ 三男さんはだれをよんだの。

三男 学校さ。

カツ あら、私も学校をよんでみたのよ。

次郎 はまにいつてみよう。

三男 いこう、いこう。船を出してくれるかもわからない。

次郎 ちがうよ。島谷さんにみさきのようにすをききにいくんだ。

ユキ 正ちゃんのおとうさんのことが、わかったかもしれないわ。

ハツ (上手を見て) 正ちゃんよ。正ちゃんがきたわ。やめてね、

その話。

ミノと正市が上手から来る。

三男 どこにいつていたの、ねえさん。

ミノ 正ちゃんのうちよ。ねえ、正ちゃん。

カツ 正ちゃんのうち、どうだったの、ゆうべ。うちなんか……。

ハツ だれ、勉強がすんだの。

カツ (手を上げる) 私。

ハツ 銀二さん、カツちゃんに本を貸してあげてね。

三男 ぼく、まんがの本。

次郎 だめだよ。三男くんはまだできていないはずだ。

ミノ あらあら、三男、勉強しているものをねえさんに見せて  
ごらん。

みんながやがやいいながら、ざしきにあがる。正市だけえんききにこしをかける。

ハツが、銀二の本ばかり二三さつの本をえんがわに持ってくる。

ハツ 正ちゃん、あがらない。

正市 ここでいいよ。

ハツ この本読まない。おもしろいのよ。  
ユキ ハツちゃん、これ教えて——。

ハツ はい。(と、ユキのそばに行く。)

三男 (えんがわて本を読んでいるカツのそばによって) なあに、それ。

カツ 三男さん。もうすんだの、勉強——。

三男 なあんだ、ハツちゃんのまねをして——。

三男、カツのそばをはなれて正市の所へいく。正市は、こしかけたままハツが持ってきてくれた本のページをめくっている。

三男 (その一さつを手にとってみる。)

正市 いいだろう。

三男、その本のページをらんぼうにめくって、また別の本を手にする。

ミノ 三男、おいで。ちがっているよ。ここの所が——。

三男、首をすくめてミノの所へいく。

カツ 正ちゃん、学校どうなっただろう。

正市 さあ、ねえ。

ユキ きつと、倉庫の前のおぶどうだながつぶれているよ。

次郎 そうだ。おしいなあ、あのおぶどう。

銀二 (えんがわに出てきて、正市のそばにある本を取り上げる。大きな声で) だれ、この本を見たのは。

みんな、その声におどろいて銀二の方を見る。

銀二 いやだな、こんなに手のあとをつけて——。

ハツ (銀二の手から本を取って) まあ、だめね、こんなことをして。

だれなの。(と、ハンカチでこする。)

カツ それ、三男さんじゃない。

三男 よごさないよ、ぼくは——。

カツ さつき、見ていたんじやないの。

三男 その本は、みんな正ちゃんが借りたんだらう。

銀二 先月買ってもらったばかりだよ、この本。(ど、ハツの手から本  
を取りかえし、本ばこにしまう。)

正市 ぼくは、まだその本を見ていないんだよ。

ハツ 銀二さん、ごめんなさい。これから、おたがいに注意し  
ましようね。

正市 よごしたのなら、あやまる。けれども、ぼくの手をござら  
ん。(ど、両手をつき出す。)

ミノ 三男、見たんだらう、その本。

正市 ハツちゃん。うちのことが気にかかるから、ぼく帰るよ。

正市、急にかげだして上手に去る。

ハツ 正ちゃん、正ちゃん。(ど、あわてて正市のあとを追う。)

一同。立ちあがってその方を見る。ハツがもどって来る。

ハツ こまつたな。だめよ。正ちゃんを今おこらせては——。

銀二 そんなつもりではなかったんだけど——。

三男 やつぱり、ぼくかな。(ど、両手を見る。)

カツ そうよ、三男さんよ。

三男 (カいっばいの大声で、) 正ちゃんも銀二さんも、ごめん。考えて  
みたらぼくだった。

ミノ ああ、おどろいた。だめよ。今になって大きな声をだし  
ても。さつき、男らしくしてあやまれればいいのに——。

ハツ しょうがないね。三男さんは——。私、正ちゃんをよん

で来るわ。

銀二 ぼくがいこう。

三男 ぼくもいく。

そこへ、下手から保が元氣のない足どりて来る。ハツがかけよる。

ハツ わかったの、みさきのようす。

保 三ぞう帰らなかつたつて——。

ハツ 三ぞうも。それで正ちゃんのおとうさんは。

保 なんでも、元村のはまに、難破した漁船が一そう流れ着いたというけど——。

次郎 どの船、それ。

保 わからない。(と、えんさきにこしをおろす。)

一同だまってしまふ。

波の音が強くなる。

とつぜん、電話のベルがなる。銀二がとびつくように走りよつて、受話器をとる。

銀二 もし、もし……もし、もし……はい、そうです。……え、

先生ですか、ぼくです。大月です。

保 先生が——。

銀二 (保の方にうなずいて) はい、おとうさんもおかあさんも、区長さんの所にいつています。……え、え……はい、正ちゃん……はい。(一同に) 正ちゃんのおとうさんの居所がわかったよ。

保 正ちゃんの——(とさげふと、銀二をおしのけるようにして、受話器をとる) 先生、市川です。……はい、……はい。すぐ知らせてきます。……そうですか、電話が不通だったものですから、……

はい、みんなここで勉強しています。……はい、代りま  
す。……はい。(みんなを見まわして) ひとりびとり電話口にお  
いでつて、次郎くん、きみから——。(と、次郎に受話器をわたす)  
ハツちゃん、正ちゃんにすぐ知らせてくれ。岩村の海岸  
に無事に着いているそうだ。

ハツ 区長さんの所には。

保 ぼくがいく。次郎くん、電話をきらないようにね。

銀二 ハツちゃん、ぼくもいつしよにいこう。

ハツと保、左右に分かれて走り去る。銀二、ハツのあとを追う。

次郎 ……はい、……はい。それでは読みます。(そばにいるミノに  
受話器をさし出して) ミノちゃん、これ持っていて。先生が作  
文を読めつて——。(ミノと代って作文を書いた紙を持って来る。)

ミノ 先生、中西です。今から次郎さんが作文を読みます。

三男 ラジオの放送だ。おもしろいぞ。

次郎 (電話口に立って) あらしの夜。先生、あらしの夜という題です。  
「学校から帰る船の中で、暴風警報が、みさきに出てい  
るのに気がついた。むかえにきてくれた岸本のおじさん  
が、『しけになるぞ。』と、ろをこぎながら心配していた。  
南方の洋上に発生したため台風が、急に進路を変えたとい  
うことだ。島に帰ると、間もなく風が出始めた。島の  
人がみんなはまに出て、船の帰りを待った。父の船が帰  
つて、しばらくして燈台のひがついた。そのころになる  
と、雨がまじつて風の勢いはますます強くなった。夕ご  
はんになつても、区長さんの家に残った父が帰らないの



で、おじいさんがみのを着てむかえに  
 いった。十分もたたないうちに、おじ  
 いさんは帰ってきた。その時初めて、  
 第弐小島丸まだけ帰って、正ちゃんのお  
 とうさんの乗っている第壱小島丸のゆ  
 くえが、わからないことを知っておど  
 ろいた。停電になったので、弟とねながら、正ちゃんの  
 うちのことを思った。戸がガタガタなるので、なかなか  
 ねつけなかった。けさになって区長さんのうちにいって  
 みた。島の人が、みんな心配して集まっていた。正ちゃ  
 んのおとうさんは、まだ帰って……」あ、先生、これか  
 ら先は書きなおします。

ミノ …… はい。(次郎に)あす清書して持っておいてって、……  
 はい。(カツに)カツちゃん、おいで、代るから。  
 カツ (えんがわににけて)いやだ、電話なんて……。  
 ミノ 先生、カツちゃんはいう  
 ことをさききませんよ。  
 カツ (電話の方に顔をつき出して) 先生、  
 いやよ、電話は……。  
 三男 おく病だな。よし、ねえ  
 さん、ぼくがかける。(ミ  
 ノと代って)先生、三男です。  
 …… はい、…… わあ(ど、受  
 話器を持ったまま電話の下に小さくなる。)





みんなの方を向いて、歌を歌えつて——。

ユキ 歌つたらいい、そうだ、カツちゃんといっしょがいいわ。

そこへ、ハツ・正市・銀二が上手から走つて来る。

銀二 正ちゃん、電話、電話。

正市 かけあがつて、三男のさし出す受話器をとる。

正市 先生、正市です、小島です。……はい、……はい、……

……はい。(へんじができなくなってきます)

ハツ (正市の手から受話器をとる。)先生。正ちゃん、うれしくて、なんに

もいえないんですよ。……はい、はい。(わらいたず、みんなに)

正ちゃんのすきな、「海はよぶ」の歌を、みんなで歌いなさ

いってよ。それで、きょうの勉強は終りにしていいんで

すつて。さあ、みんなこつちに集まつて——。

先生、それでは、今から、「海はよぶ」を歌います。(みんなに)

いい、はい。(とあいずをする)

ハツのあいずで、みんな歌い始める。その声が、だんだん力強く高まつていく。

### 学習の仕方

- 一 このしばいを、まとめて話ができるように学習しましょう。
- 二 実際に演じるには、どうしたらいいか、考えながら学習しましょう。
- 三 このしばいを演じたり、読んだりして感じたことを書きましょう。
- 四 このしばいを中心に「海国日本」を話題として話しあひましょう。
- 五 この本の全課をまとめて、「日本のわか草」について話しあひましょう。

夏休みの国語学習の計画をたてましょう。

新しいことば

ページ	4	かんざし	
5	しばふ		
6	つかみた(そう)	母子	
7	庭園	きざみ足	かぎつけ(た)
8	全身	絶望	つばき
9	かば(つて)	おのの(き)	歯なみ
	怪物	めんくら(つて)	しわがれ(て)
	悲壮	深刻	厳しゆく
11	わか草		保持
12	かわりばんこ	石けり	した(つて)
	満開	うす緑	
13	かわら	さざなみ	うね(つて)
	歌声	人かけ	じゃれ(ついた)
14	ベンチ	人なつこい	うっすら(ど)
15	(ゆか)ばや	(のびよ)かし	さみどり
	ひろの		
16	ゆめ	心持	
17	一昨年	ふるま(つて)	孝心
18	戦後	不幸	あえぐ
19	たちなお(つて)	転校	
20	もえ(て)	おいおい	
21	コース	助言	
22	共通	なやみ	置きざり
23	一うね	栽培	土質
24	余地	様式	配水
25	組織	将来	
26	当然	都市生活	あこがれ

27	たえ(られない)	目標	
28	わざわざ	方面	中学校
29	進路		
30	村会		
31	捕手	打者	
32	協力	ボールサイン	投手
33	生死		
34	どうるい	しきつ	セーフ
35	アウト	一しゅん	扇形
	かなめ		
36	決断		
37	冬ごもり	北国人	いたわる
38	地表	ルバーブ	開こん地
39	つつみ	そぞろあるき	テニス
40	クラブ	はだ(寒い)	かたがき
41	トーナメント	政札人	
42	コート	さむざむ	出場者
43	優勝	準決勝	ユニホーム
44	転向	英国	遠征
45	シャツ	英雄	崇拜
46	えんりよ	ラケット	
47	かん	ガット	試合
48	塔	風景	街路
49	展開	上達	負けん気
50	不敗	根気	いどん(てきた)
51	うつどうしい	ライラック	むせかえる
52	特有		
53	握手	奮どろ	じょうたん
54	対戦		
55	無敵		
56	スポーツマンシップ	真髓	さん辞

76 犯罪 予想 常置  
 75 条件 じゆう実 提供  
 74 身近 たゆみな  
 73 天文現象 自然現象  
 72 価値 重要  
 71 たやすく 発生  
 70 欲求 部落生活 自己  
 範囲 地域  
 69 本能 本能 おく測 日常生活  
 67 レコード しぐさ 人間味  
 66 かきたてられて 興奮 ゴール  
 ピッチ 着順  
 65 めだ(って) ユーモラス トップ・ギヤ  
 トビウオ 光景

54 役員 団体 選手権  
 53 進出 メインマスト 平泳 女性  
 馬術  
 52 レスリング 三段どび 貴重  
 レベル 艇  
 51 列強 水泳 奮戦  
 活躍 単複  
 50 予選会 短距離 具眼  
 柔道 信望  
 49 向上 マラソン  
 48 オリンピック 競技 古代  
 祭典 戦争  
 46 奇権 難関  
 妙技 一むち 突破

89 分校 迷子 ぶん校 迷子 ぶん校 迷子  
 88 燈台守 ざしき 本屋  
 85 あら海 ぶりかご  
 84 どどう ほづな しば(れば)  
 83 正義  
 82 こっこく(と) レーダー 標識燈  
 81 天然色 立体感 テレビジョン  
 80 音響 動的 陰影 写真  
 79 独特 しみ動 こみ(った) 銀まく  
 78 音声 アンテナ 電波  
 77 触手 放送 営業部  
 通信網 急速 超短波

64 ストローク しぶき 明快  
 63 もぐり(んだ) かん潔  
 62 いきど(いた) 効果的  
 61 ひややか(に) かねあい  
 60 観衆 使命 演奏 効果的  
 59 ミス スコア しゃつ光  
 58 実きよう 両軍 得点  
 57 先ばい 建設 寄与  
 56 接戦 熱狂 連勝  
 ぼう高どび 不屈  
 55 対等 発揮 注目  
 ホッケー スケート

109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	95	94	93	91	90
清書	みの	しけ	おしの(ける)	ベル	難破	あやま(れば)	よこ(さない)	すくめ(て)	らんぼう	ことずか(った)	床の間	算数	区長	竹へい
			不通	居所			先日	倉庫						
	おく病	ゆくえ								こする				
														夕ごはん

式 (108)	供 (75)	貴 (52)	兼 (35)	構 (7)
壺 (108)	犯 (76)	軍 (58)	拝 (37)	巖 (9)
	迷 (89)	潔 (63)	破 (43)	昨 (17)
	倉 (101)	己 (70)	浅 (44)	孝 (17)
	暴 (107)	提 (75)	権 (45)	差 (24)

本書の中、とくに新しく執筆を依頼したものは次の通りである。

現実を追って  
燈台島 石森延男  
栗原一登

さし絵  
関合正明 樽原健三  
浜野正義

そうてい  
河野鷹思

新国語 六年上  
小国 621  
わか草

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION  
(DATE SEP. 14, 1950)

昭和二十五年九月十四日 印刷  
昭和二十五年九月十八日 発行

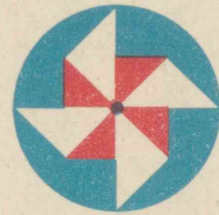
定価 四十五円五十銭

著者 垣内松三  
八木橋雄次郎

発行者 光村図書出版株式会社  
代表者 大江恒吉

印刷者 光村原色版印刷所  
代表者 光村利之

発行所 東京都品川区東大崎一丁目五三三番地  
光村図書出版株式会社



6  
上

なまえ

文庫

50  
807

広島大学図書

0130449807



図書出版株式会社